

イドリツヒ」ニ於テ應聘可致旨申出タル趣ニ付同人ハ現ニ英國倫敦ニ居住致居本使親シ其人物ヲ精鑑スルノ機會ヲ不得候得共普國文部大臣ノ推挙ニ信頼シ遂ニ本月十日ヲ以テ別紙獨乙文契約書ニ双方記名ヲ了シ候次第ニ有之候

將又同教師渡航旅費支給方ニ関シテハ八月十四日付送第七六號信ヲ以テ横濱正金銀行ノ爲替取扱店タル当地「ドイツエバンク」ヨリ支給スヘキ旨曾爾前任大臣ヨリ申越有之候へ共前頭ノ通り本人ハ倫敦ニ現住シ同地ヨリ直チニ本邦へ渡航可致都合ニ有之候間正金銀行倫敦支店ト交渉ノ上同支店ニ於テ本使ヨリ發給シタル正当本人タル証明書ト引換ヘニ金九百円ニ相当スル英貨ヲ支払ヒ候事ト相成候而シテ右金額ニ対スル正当領收書ハ同支店ヨリ其筋へ直接送附致候而ニ有之候間左様御了知有之度候尚右「ハイドリツヒ」義ハ北獨ロイド會社汽船「プリンツハインリヒ」號ニ搭乘シ赴任可致来年一月四日横濱着ノ豫定ニ有之候ニ付テハ土地不案内ノ事故可相成ハ音楽学校ヨリ吏員一名横濱へ出張出迎ハシメラレ度旨本人ニ於テ懇願致居候右本件ニ関スル顛末別紙契約書相添及具披候間其筋へ御轉報相成度候敬具

明治三十四年十月二十四日

在獨特命全權公使井上勝之助

外務大臣小村壽太郎殿

〔手書き〕

〔外國人教師關係書類〕明治三十二年〜大正十一年

ハイドリヒの最初の契約期間は明治三十七年までで、待遇は奏任に準じ一カ年金千式百円が支給された。築地四十三番地に居を定めたが、三

十七年四月からの再契約後は住いを横浜山手一七九に移している。三十八年六月三日付身分が奏任五等以上に準じられ、四十一年（一九〇八）一月二十三日付をもって勲五等旭日章が下賜された。

ハイドリヒは他の教師とちがい、曲を教える前にまずその形式を分解して教え、よく了解しないとレッスンを始めなかったそうである。彼の弟子の一人である小松耕輔氏は「メヌエットのところではどんな踊りか見当がつかなかったら先生はいきなり立って踊り、一緒に踊れといって部屋中ぐるぐると踊ったことがある」と語っている。そしてハイドリヒは今日ではあたり前の暗譜演奏を奨励した。東京音楽学校といえども当時は演奏会に楽譜を持って出していた。

四十二年（一九〇九）東京音楽学校を満期退職後は帰国したと思われるが、その後の消息は明らかでない。

(七) シャルロtte・フレック Charlotte Fleck (一八七八〜?)

在職期間 明治四十年〜四十一年（一九〇七〜〇八）

嘱託講師

担当科目 独唱歌

履歴（要約）

一八七八年一月二十四日、普国シテッティン Steina 市に生れる。

一八八三年より一八九一年までスウキーネンシヨンテ Swienemünde 市高等女学校に在学。

一八九八年、同市において声楽大家リリー・レーマン女史の弟子に就き唱歌の教授を受く、その後伯林ステルン音楽院に入学し三カ年間修業、一九〇五年卒業。

卒業後は同音楽院で教えるかたわらベルリン市その他の都市で演奏活動を行い、翌年十二月にはベルリン歌劇場と契約した。一九〇七年（明治四十年）十月母校の校長ホルレンデルの紹介によって東京音楽学校に

赴任してきた。契約期間は四十三年八月三十一日まで、月給二百円が支給されることになった。しかし個人的事情により四十一年(一九〇八)七月二十八日付で依願退職した。

(八) ルドルフ・ロイテル Rudolph Ernest Reuter (一八八八?)

在職期間 明治四十二年～四十五年(一九〇九～一九一二)

嘱託講師

担当科目 唱歌、ピアノ

明治四十二年三月十一日付で東京音楽学校校長湯原元一はドイツ駐在官畑良太郎参事官にあてて「ドイツから唱歌の教師を求めたいが、ユンケルの我儘三昧の風下に立つのは好ましくないという理由で日本に来手がないのだが、ユンケルだって永久に東京音楽学校にいるわけでもなく、解雇出来る日も真近いので適当な教師を探してほしい」という内容の手紙を発信した。そしてこの求めに応じて来日したのがルドルフ・ロイテルである。彼はドイツ系アメリカ人で、一八八八年九月二十一日アメリカのニューヨークに生れた。父はドイツ人教会音楽家で幼少より両親について音楽を学んだ。十二歳でハイスクールに入学、ニューヨーク市のピアノ教師カール・レーデルに師事、さらにオルガンも習得して十五歳でプロテスタント教会のオルガニストの地位を得て、地域の合唱団の指揮者ともなった。一九〇六年ベルリンの王立高等学校に入学、対位法をウォルフ教授に、管弦楽法をマックス・ブルッフ博士に、声乐をシタンゲ教授に就いて学んだ。明治四十二年(一九〇九)五月十九日、東京音楽学校の嘱託講師として来日、初めの契約で四十三年(一九一〇)八月三十一日まで声乐およびピアノ教師として雇入れられた。一カ月金四百円給与。同年九月二十三日付で四十五年(一九一二)八月三十一日の契約が成立した。四十三年(一九一〇)十一月二十二日身分は委任取扱いとなる(『外国人教師關係書類』明治三十二年～大正十一年)。

大正三年(一九一四)帰米、シカゴ音楽カレッジの教師をつとめ、その間にアメリカ各地を巡演、アメリカ作曲家の作品紹介に努力した。晩年はアメリカ音楽家協会会長をつとめた。

東京音楽学校時代の弟子には貫名美名彦、川久保美須々、石高テルらがいる。その他多くの英才を育てた。ロイテルは「四つ葉のクローバ」の作曲者としても知られている。この曲は明治四十五年四月二十六日の学友会男子部春季修学旅行演奏会のおり、千葉県師範学校において初演された。

在日中彼はピアニストとして幅広い演奏活動を行った。東京音楽学校主催以外の音楽会から二種類の批評を紹介しておこう。

〔明治四十二年十一月二十四日有楽座において〕

ロイテル氏音楽會

今春來任せし東京音楽学校教授ルドルフ、ロイテル氏は昨年獨逸伯林音楽學校を優等にて卒業し爾來同國樂壇を賑はせし齡未だ二十三の青年。ピアニストなるが今回其妙技を弘く内外人に聴かさんが爲め英獨米露の各國大使の賛助を得て十一月二十四日午後八時より有楽座に於て其演奏會を催せり、記者は既に兩三回同氏の妙技に接したるが今回は更に其手腕に敬服せり、曲目中。パカニイニヴワリエシヨンの如きは其テクニツクに於て到底凡手の企て及ばざる處なるが氏の鮮なる技術は遺憾なく是を演奏し得たりと云ふべく最後のリストのレゼンドは更に氏の非凡なる技術を證明するものと云ふべし。其他ベエトオヴエンのロンド。ドビュシイのサラバンデ。マクドエルのスコツチポエム何れも其々の感興をひけり。氏の樂風に於て最も注意すべきは手法極めて摯實にして些の輕佻の風を見ざることに、音の剛柔和聲の均衡音色の風趣に富める點にして形式美の諸點にあ